

25歳の若さでコンサートマスター

——2017年3月11日に聴いた《椿姫》では、第2幕でコンサートマスターの素晴らしさが顕著になり、第3幕への前奏曲ではヴァイオリンを聴いただけで泣きたくなるという体験をしました。どんな気持ちで弾いていらしたのですか。「あれは私にとって初めての《椿姫》で、初日以外は全部弾き、とても勉強になる体験でした。ヴェルディは私にとって、いちばん身近で、喜んで弾ける作曲家ですし、アンナ・ネットレブコ等、豪華キャストとの共演も初体験でした。それにマエストロは、名前だけしか知りませんでした。私が、ネットロ・サンティという、イタリア・オペラを世界中に広め、膨大な経験を積んでいる指揮者で、彼もスカラ座デビューということ（注：1970年代に客演している）、『初めて』が重なったプロダクションでした。私にとっては

連載50回目の最終回を飾るのは、ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団の4人の第1コンサートマスターの中でいちばん若く、そして唯一の女性であるラウラ・マルツァドーリだ。実は2017年に聴いたヴェルディ《椿姫》でのソロが忘れられず、その時のコンサートマスターを探していたところ、ルツェルン音楽祭のイースター音楽祭出演時に設定したインタビューに、急遽代役として現れた彼女がその時の奏者だったという。



筆者が感動したというソロを弾いたマルツァドーリ。運命の巡り合わせを感じるインタビューとなった ©中東生

オペラやバレエも、そのストーリーを超えて、室内楽や協奏曲を弾くように、ソリストとしての体験から自分の内面を感じる音楽を、ソリストのような情熱と集中力で表現しています」

——25歳の若さで、コンサートマスターの職に就こうと思っただけは何かか。

「私は母の勧めで、4歳直前から鈴木メソッドのとても良い先生についていたので、その先生に喜んでもらいたい一心でヴァイオリンを弾いていました。小さいころからバガニーニを弾くような、いわゆる神童ではなく、他の子供たちと一緒に弾くことに意義を見出していたので、室内楽に興味を持っていました。12歳で音楽家を目指してからは、もちろんソリストとしても研鑽を積みましたが、「人と演奏する」ということが、最も情熱を傾けられることでした。またザハール・ブロン先生とチューリヒで勉強中だった時に、スカラ座フィルのコンサートマスターのオーディションがあると勧められ、準備するうちに『この仕事がいい』とモチベーションが上がって、『何が何でもこのポストを手にした』という熱望を感じてきたのです。『念ずれば通ず』という諺は本当なのだと言明された体験でした。私はイタリアを離れる気になれず、ブロン先生の元へも3年間イタリアから通っていたほどなので、オーケストラに入るのならば、スカラ座フィルが最高の選択でした。無事合格して、ダニエル・バレンボイムの元で6カ月の試

連載

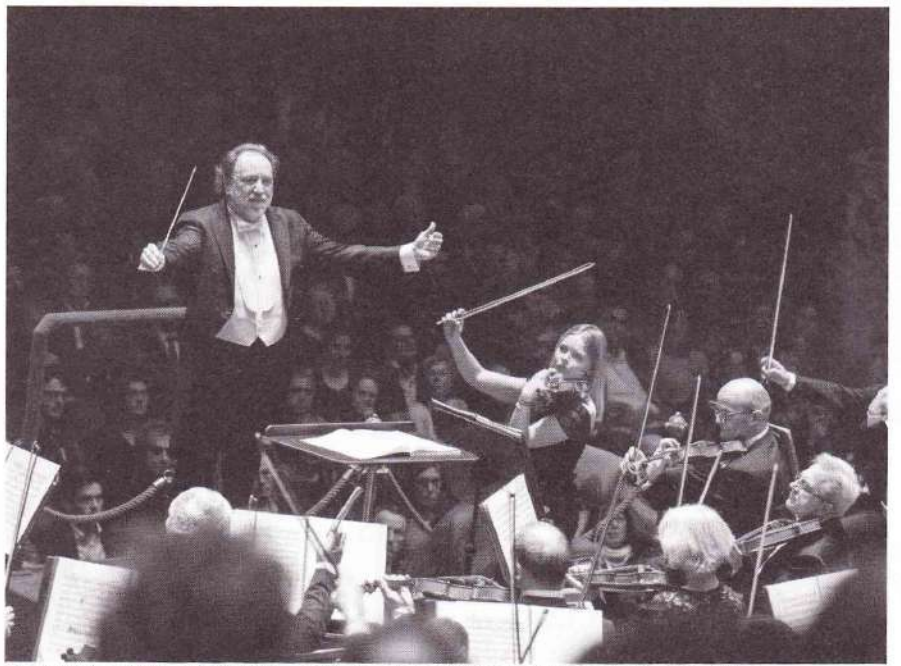
世界のコンサートマスターに聞く
Interview with Concertmaster in the world

第50回・最終回 ●ラウラ・マルツァドーリ

(ミラノ・スカラ座フィルハーモニー管弦楽団第1コンサートマスター)

Laura Marzadori-1st concertmaster of Filarmonica della Scala

取材・文 中東生 Shinobu Naka



コンサートへボウでの公演から。シャイーの下では安心して弾くことができるという
© Concertgebouw / Ronald Knapp

ラウラ・マルツァドーリ Laura Marzadori

1989年生まれ、イタリア、ボローニャ出身。4歳前からフィオレンツァ・ロージに鈴木メソードでヴァイオリンを学び、エンツォ・ホルタにも師事。2005年、ボローニャ音楽院を卒業。アンドレア・アマティ国際コンクール等、数々のコンクールを制覇し、ボスタッキー国際コンクールではバガニーニのカプリース特別賞や、ヴァイオリン・コンクールのイタリア国内最高峰「ヴィットーリオ・ヴェネツィア賞」で、審査員特別最優秀モーツァルト賞も受賞している。クラウディオ・シモーネの「イ・ソリスト・ヴェネチ」のソロ・ヴァイオリンを務めた。2013年にはアマール三重奏団として、ピエロ・ファルツリコンクールで国内音楽評論家協会賞「ランコ・アッピアティ」を受賞している。2014年、スカラ座フィルの第1コンサートマスターに就任。

いちばん好きなオペラになったほどです。シャイーは精緻な音楽を構築するタイプで、すべてのバランスを重視します。また歌手の扱いが上手なので、安心して弾くことができます」

「スカラ座フィルの特徴はどこかと思えますか。」

「他のオーケストラは、最初の練習から上手に弾けると思いますが、私たちの場合、練習は『まあまあ』なのです。それが本番になると、スペシヤルな演奏ができるのです。特別な時にだけ、魂が感じられるようです。それからやはり、いつもオペラを弾いているので、イタリア・オペラが身に付いた音を出します。イタリア魂の化身です。その音色を言葉で表現すると、暗めの重い音ですが、いつも同じ音ではないのです。あとはスカラ座のオーケストラ・ピットの音響が素晴らしいので、その影響を受けた音になっていると思います。舞台上で弾くと乾いた音がするのですが、オーケストラ・ピットでは、ソリスト的な響きが得られて完璧です」

私の考える「コンサートマスターの仕事は、皆の耳になることです」

コンサートマスターの役割

「若い女性がコンサートマスターを務める苦労はありましたか。」

「同僚とはまったく問題はありませんが、たとえば保守系の指揮者が来た

時など、穴の開いたジーンズに目を丸くされたようなことはありません(笑)。でも、それは初対面の時だけで、その後は問題にはなりません。私の考えるコンサートマスターの仕事は、皆の耳になることです。歌手が聴こえにくい楽器なども代わりに聴いてキューを出したり、指揮者の意図をいち早く聴き取って、皆に伝えたりします。重責を感じますが、それが自然にできればそれほど難しいことではなく、自分では自然にできていると思います。その他、みんなの声をまとめるのも、コンサートマスターというタイトルを与えられた者の役割だと思います。このオーケストラは人間味にあふれていて、個性の強い楽団員の集まりなので、まとめるのは容易なことではありませんが、それも仕事のうちです。また、私たちはオペラなどで12回連続公演ということもざらにあるので、自然と下がつてしまつてモチベーションを維持するのも、コンサートマスターの務めでしょう。運弓を記すのも4人のコンサートマスター

1で分担しますが、今は各指揮者が日頃から使っている譜面を持って来ることが多いので、大した仕事量ではありません」

「今後の目標は何ですか。」

「コンサートマスターの職についてからは、それを最優先にしているので、これからはオーケストラと共に人間的に成長して、朝起きた時に、いい気持ちで一日が始められるような人生を歩んでいきたいです」

用期間が始まりましたが、彼とは最初から良い化学反応のようなものを感じ、たくさんことを学びました。今もその関係は続き、例えば、去年ベルリンのコンツェルトハウスで、彼は大ホール、私は小ホールで同じ日に演奏会があり、偶然会えた時も、まるで娘のように迎えてくれました」

バレンボイムとシャイー、スカラ座フィルの特徴

「ちょうど音楽監督が代わる時に入団

されたわけですが、ダニエル・バレンボイムとリックカルド・シャイーでは、スカラ座フィルはどう変わりましたか。「まったく違う二人の間で、私たちは両極を学べていると思います。バレンボイムとは音楽的な音を磨かれ、火山の噴火のようなコンサート体験もありました。マラーの録音も忘れ難く、また彼のベートーヴェンは格別で、ベートーヴェン《フィデリオ》を彼の棒で弾いたため、今ではこのオペラが